

## 表音文字から表語文字へ

万葉人は“波奈”から“ハナ”の音声を取り出し、それで花といふ言葉を作り上げ、意味を汲取ったのですが、“ハナ”といふ音声の言葉には「端・花・鼻・洩」などの同音異語がありますので本当はその中のどれであるかを決定することは出来ません。

そこで、「端・花・鼻・洩」などの漢字が解るやうになりますと、“波奈”と書くよりも、“花”と書いた方が解り易くて好い、と考へるやうになりました。

たちばな の はな ちるまの ほととぎす かたこいしつづ なくひしそあおき  
 橘 之 花 散 里 乃 霍 公 鳥 片 恋 為 作 鳴 日 四 曾 多 寸

右は万葉集後期の作品に見える表記法です。この歌では「乃・四・曾・寸」の四字だけが“仮借”で、他の漢字は逆に“音”が捨てられてみて、“意”の方が借りられてゐます。

その結果、“橘”“花”などの漢字は、“たちばな”“はな”といふ日本語を表す文字となつてゐます。つまり、「中国語を表す漢字を改造して、日本語を表す“表語文字”にしてしまった」のであります。

この用字法は“表語文字”として文字本来の性格を完備してゐますので、漢字を“借”りてはゐますが、“仮借”とは言ひません。

アッカード人は、初めはスメール文字を仮借して、それでアッカード語を表記してみたのですが、習得には容易であつても機能の悪い“表音的表記法”に不満を感じずうになつたと思はれます。なぜならばその数千年後に日本人が行つた「外国の文字を改造して自国語を表す“表語文字”に改造すること」を行つてゐるからです。

かうしてアッカード人はスメール文字をアッカード語を表すための表語文字に改造して行きましたが、その字数は少なくとも千字以上、数千字にも及ぶものでありましたので全く新しい文字を創作するのに劣らない大変な事業だつたと言ふことが出来るでせう。

だからこそ、広い世界の長い人類の歴史の中でも、この例がアッカードと日本以外には全く見ることが出来ないのだと思ひます。その他の民族は、総て僅か数十字の文字を仮借するだけで一応の用が足りる“表音文字”で済ませて来たのだと思ひます。

「表音文字は表意文字より進歩した文字である」といふ欧米の学者たちの説が牽強附会の説である事は、アルファベット発生の歴史を観ただけで判ります。まして、アルファベットを発明したアッカード人が、これを捨てて、大変な難事業を敢行して、スメールの表語文字をそのままアッカードの表語文字として使へるやうにした事実を観れば、一層よく判ることと思ひます。